小倉山荘色紙和哥

跡見学園女子大学図書館蔵書

天智天皇

秋の田のかりほの菴のとまをあらみ
わか衣手は露にぬれつゝ

持統天皇

春すきて夏きにけらし白妙の
ころもほすてふあまのかく山

柿本人麻呂

あしひきの山とりのおのしたりおの
なかなかし夜をひとりかもねむ

山邊赤人

たこの浦にうち出てみれはしろたへの
冨士の高根に雪はふりつゝ

猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の
声きく時そ秋はかなしき

中納言家持

かさゝきのわたせる橋にをく霜の
しろきを見れは夜そふけにける

安倍仲麿

天の原ふりさけみれは春日なる
三笠の山にいてし月かも

喜撰法師

我いほは都のたつみしかそすむ
世をうち山と人はいふなり

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらに
わか身よにふるなかめせしまに

蝉丸

これやこの行も帰るもわかれては
しるもしらぬもあふさかの関

参議篁

わたの原八十嶋かけて漕いてぬと
人にハ告けよあまのつり舟

僧正遍昭

あまつ風雲のかよひ路吹とちよ
乙女のすかたしはしとゝめむ

陽成院

筑波ねの峯よりおつるみなの川
恋そつもりて淵となりぬる

河原左大臣

みちのくのしのふもちすり誰ゆへに
みたれそめにし我ならなくに

光孝天皇

君かため春の野に出て若菜摘
わか衣手に雪はふりつゝ

中納言行平

立わかれいなはの山の峯におふる
まつとしきかは今かへりこむ

在原業平朝臣

ちはやふる神代もきかす竜田川

からくれなゐに水くゝるとは

藤原敏行朝臣

住の江の岸による浪よるさへや
夢のかよひち人めよくらん

伊勢

難波かたみしかきあしのふしのまも
あはてこの世をすくしてよとや

元良親王

侘ぬれは今はたおなし難波なる
身をつくしてもあはんとそ思ふ

素性法師

いまこんといひしはかりに長月の
有明の月をまちいてつるかな

文屋康秀

吹からに秋の草木のしほるれは
むへ山風をあらしといふらん

大江千里

月みれはちゝに物こそかなしけれ
わか身ひとつの秋にはあらねと

菅家

ぬさもとりあへす手向山
紅葉の錦神のまに〳〵

三條右大臣

名にしおはゝ逢坂山のさねかつら
人にしられてくるよしもかな

貞信公

をくら山みねのもみち葉心あらは
今ひとたひの御幸またなむ

中納言兼輔

みかの原わきてなかるゝいつみ河
いつみきとてか恋しかるらむ

源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける
人めも草もかれぬとおもへは

凡河内躬恒

心あてにおらはやおらむはつ霜の
おきまとはせる白菊の花

壬生忠岑

有明のつれなくみえしわかれより
暁はかりうきものはなし

坂上是則

朝ほらけ有明の月とみるまてに
吉野の里にふれる白雪

春道列樹

山河に風のかけたるしからみは
なかれもあへぬもみちなりけり

紀友則

久かたのひかりのとけき春の日に
しつ心なく花のちるらむ

藤原興風

誰をかもしる人にせむ高砂の
松もむかしの友ならなくに

紀貫之

人はいさ心もしらすふるさとは
花そむかしの香ににほひける

清原深養父

夏の夜はまたよひなからあけぬるを
雲のいつこに月やとるらむ

文屋朝康

白露に風のふきしく秋の野は

つらぬきとめぬ玉そちりける

右近

わすらるゝ身をは思はすちかひてし
人の命のおしくも有哉

参議等

浅茅生の小野のしの原しのふれと
あまりてなとか人の恋しき

平兼盛

忍ふれと色に出にけり我恋は
物や思ふと人のとふまて

壬生忠見

恋すてふ我名はまたき立にけり
人しれすこそ思ひそめしか

清原元輔

契りきなかたみに袖をしほりつゝ
末の松山波こさしとは

権中納言敦忠

あひみての後の心にくらふれは
昔は物を思はさりけり

中納言朝忠

逢事のたえてしなくはなか〳〵に
人をも身をもうらみさらまし
謙徳公
あはれともいふへき人はおもほえて
身のいたつらになりぬへきかな
曾祢好忠
由良のとをわたる舟人かちをたえ
行衛もしらぬこひのみちかな
恵慶法師
八重葎しけれる宿のさひしきに
人こそみえね秋はきにけり
源重之
風をいたみいはうつ波のおのれのみ
くたけて物をおもふ比かな
大中臣能宣朝臣
みかきもり衛士のたく火のよるはもえ
ひるはきえつゝ物をこそおもへ
藤原義孝
君かためおしからさりし命さへ
なかくもかなとおもひけるかな

藤原實方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草
さしもしらしなもゆる思ひを

藤原道信朝臣

明ぬれはくるゝものとはしりなから
猶うらめしきあさほらけかな

右近大將道綱母

なけきつゝひとりぬる夜のあくるまは
いかにひさしき物とかはしる

儀同三司母

わすれしの行末まてはかたけれは
けふをかきりの命ともかな

大納言公任

瀧の音は絶て久しく成ぬれと
名こそなかれて猶きこえけれ

和泉式部

あらさらむ此世の外の思ひてに
いまひとたひのあふこともかな

紫式部

めくりあひて見しやそれともわかぬまに

雲かくれにし夜半の月かな

大弐三位

有馬山ゐなの笹原風ふけは
いてそよ人をわすれやはする

赤染衛門

やすらはてねなましものをさよふけて
かたふくまての月をみしかな

小式部内侍

大江山いく野の道のとをけれは
またふみもみす天の橋立

伊勢大輔

いにしへのならの都の八重桜
けふ九重ににほひぬるかな

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも
よにあふさかの関はゆるさし

左京大夫道雅

今はたゝ思ひ絶なむとはかりを
人つてならていふよしもかな

権中納言定頼

朝ほらけ宇治の河霧たえ〳〵に
あらはれわたる瀬々の網代木

相模

恨みわひほさぬ袖たにある物を
恋にくちなむ名こそおしけれ

大僧正行尊

もろともにあはれと思へ山さくら
花よりほかにしる人もなし

周防内侍

春の夜の夢はかりなる手枕に
かひなくたゝむ名こそ惜けれ

三条院

心にもあらてうき世になからへは
恋しかるへき夜半の月かな

能因法師

嵐ふくみむろの山のもみち葉は
竜田の川の錦なりけり

良暹法師

さひしさに宿を立出てなかむれは
いつくもおなし秋の夕暮

大納言経信

夕されは門田のいなは音つれて
蘆のまろやに秋風そふく

祐子内親王家紀伊

音にきく高師の浜のあた浪は
かけしや袖のぬれもこそすれ

権中納言匡房

高砂のをのへのさくら咲にけり
外山の霞たゝすもあらなむ

源俊頼朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしよ
はけしかれとはいのらぬものを

藤原基俊

契りおきしさせもか露を命にて
あはれことしの秋もいぬめり

法性寺入道前関白太政大臣

わたの原こき出てみれは久かたの
雲井にまかふ沖つ白波

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の

われても末にあはんとそ思ふ

源兼昌

淡路島かよふ千鳥のなくこゑに
いく夜ねさめぬすまの関守

左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲の絶まより
もれいつる月のかけのさやけさ

待賢門院堀河

長からん心もしらす黒かみの
みたれてけさは物をこそ思へ

後徳大寺左大臣

郭公鳴つる方をなかむれは
たゝ有明の月そ残れる

道因法師

おもひわひさても命はあるものを
うきにたへぬは涙なりけり

皇太后宮大夫俊成

世中よみちこそなけれ思ひ入
山のおくにも鹿そ鳴なる

藤原清輔朝臣

らへは又此ころやしのはれん
うしとみし世そいまは恋しき

俊恵法師

夜もすから物思ふころは明やらて
ねやのひまさへつれなかりけり

西行法師

なけゝとて月やは物を思はする
かこちかほなる我なみたかな

寂蓮法師

村雨の露もまたひぬまきの葉に
霧たちのほる秋の夕くれ

皇嘉門院別当

難波江の芦のかりねの一夜ゆへ
身をつくしてや恋わたるへき

式子内親王

玉の緒よたえなはたえねなからへは
しのふることのよはりもそする

殷富門院大輔

見せはやな雄島のあまの袖たにも
ぬれにそぬれし色はかはらす

後京極摂政太政大臣
蛬なくや霜夜のさむしろに
ころもかたしきひとりかもねむ

二条院讃岐
わか袖は塩干にみえぬ沖の石の
人こそしらねかはくまもなし

鎌倉右大臣
世中は常にもかもななきさこく
あまの小船のつなてかなしも

参議雅経
み吉野の山の秋風さ夜ふけて
故郷さむく衣うつ也

前大僧正慈円
おほけなくうき世の民におほふかな
わかたつ杣に墨染の袖

入道前太政大臣
花さそふ嵐の庭の雪ならて
ふりゆくものは我身なりけり

権中納言定家
こぬ人をまつほの浦のゆふなきに

焼やもしほの身もこかれつゝ

従二位家隆

風そよくならの小川の夕くれは
みそきそ夏のしるしなりける

後鳥羽院

人もおし人もうらめしあちきなく
世をおもふ故に物思ふ身は

順徳院

百敷や古き軒端のしのふにも
なほあまりある昔なりけり

寛の
雅楽
けい書

跡見学園女子大学短期大学部図書館
☎03(3943)1368
1001814589

正徳二年
壬辰年
忠廣記